

北海道という ヴァナキュラーな風景

| 日 時

平成 29 年 9 月 14 日 木 17:30 ~ 19:30

| 会 場

北海道大学 遠友学舎
(札幌市北区北18条西6丁目)

北大の有志で取り組むプロジェクト「TERRACE—科学とアートが会う場所—」では、科学者とアーティストが会う場をつくり、これまで気付かなかったコトやモノの価値、社会の課題を見つけ、「科学とアートで」表現することに挑戦しています。

本イベントでは、多彩なゲストとともに北海道特有の歴史、景観、札幌という都市を見つめ直すことで、私達が過ごすキャンパスの価値について改めて考えてみたいと思います。2026年に150周年を迎える北海道大学ですが、キャンパスがある「この地」には、数千年前から人々の営みがあったことを示す遺跡が広がっています。この地の歴史を知り、現在キャンパスが置かれている環境を客観的に見つめ、未来のキャンパスのあり方について様々な切り口から語り合います。

吉増 剛造 (よします ぎょうぞう) 氏

1939年東京都生まれ。1964年に『出発』でデビューして以来、現代詩の最先端を疾走し続けている。主な詩集に『黄金詩篇』(1970年)、『オシリス、石ノ神』(1984年)、『花火の家の入り口で』(1995年)、『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』(1998年)、『怪物君』(2016年)など多数。2015年、日本芸術院賞・恩賜賞、日本芸術院会員。2006年から映像作品「gozo Ciné」を発表する。朗読パフォーマンスの先駆者としても知られ、1960年代から現在まで、日本各地およびフランス・イタリア・アメリカ・ブラジル・韓国などで詩の朗読を行っている。2016年、国立近代美術館にて「声ノマ全身詩人、吉増剛造展」開催。



今福 龍太 (いまふくりゅうた) 氏

文化人類学者、批評家。東京に生まれ湘南で育つ。1982年よりメキシコ・キューバ・ブラジルで人類学的調査に従事。中部大学・慶応大学 SFC・札幌大学などで教鞭をとり、2005年から東京外国語大学大学院教授。サンパウロ・カトリック大学でも随時セミナーを担当。同時にキャンパスの外に遊動的な学びの場の創造を求め、2002年より巡礼型の野外学舎「奄美自由大学」を主宰。著書に『ミニマ・グラシア』『薄墨色の文法』『ジェロニモたちの方舟』『サンパウロへのサウダージ』(レヴィ＝ストロースとの共著)ほか多数。2017年『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』で第68回回読売文学賞受賞。主著『クレオール主義』『群島 - 世界論』を含む新旧著作のコレクション〈パルティータ〉全五巻が水声社から刊行中。



小篠 隆生 (おざさ たかお) 氏

北海道大学大学院工学研究院 准教授。
北海道大学工学部建築工学科卒業。博士(工学)。一級建築士。
研究分野は建築学 / 都市デザイン・建築計画、キャンパス計画。著書に『キャンパスマネジメントハンドブック』(共著、丸善)、『大学地域共創まちづくり』(共著、学芸出版社)、『いまからのキャンパスづくり』(共著、丸善)。2001年「遠友学舎の設計」にて日本建築学会北海道建築賞受賞。2016年「東川小学校・地域交流センター」で北海道赤レンガ建築奨励賞を受賞。

